空への憧れを忘れた燕

愛宕無

あの頃、空は遠かった。
空へ憧れ、蒼々と広がる世界を自由に飛ぶ鳥を羨んでいた。
だから、僕はブランコを漕ぎ、遠すぎる空へと飛びだしていた。

「こんにちは」
ギギギと音を立てる木製の引き戸を勢いよく開け放ち、僕は中にいる家主に向かってそう叫ぶ。
「燕。よくきたね」
しわがれたこえが奥からし、腰の曲がった老人から顔をだす。柔和な笑みを浮かべているこの人は、僕のじいちゃんだ。
「お父さん。お世話になります」
僕の後ろから、父ちゃんと母ちゃんがあいさつをする。
「まあ、あがられー」
ばあちゃんに促され、僕たちは家へと上がる。蚊取り線香のにおいと、古書の独特のにおいが、田舎にやってきたことを実感させられる。
「ばあちゃん。じいちゃんは？」
姿を現さないじいちゃんのことを訊ねる。
「勇気たちと、海にいっとるわ」
勇気とはいとこの大学生のにいちゃんで、今年は一人で帰省してきた。
「燕においしい貝を食べさせとーて、はりきっとるみたいじゃな」
じいちゃんは、歳で船を降りたが、元漁師だったらしい。未だに、漁師の血が騒ぐのか、時間があれば海にいっている。そして、じいちゃんのお蔭で僕たちは、田舎に帰るたびにおいしく、新鮮な海の幸を堪能できるというわけだ。

夜になり、じいちゃんやにいちゃんがとってきた新鮮な瀬戸の海の幸やばあちゃんが丹精込めて作った野菜が並んだ食卓に、僕は満足していた。更に母親が帰ってきたということで、近所のおじさんやら同級生やらが集まり、宴会が開かれた。
僕はというと、やってきた子供たちと一緒にトランプなどをして遊んでいた。
「つーくんは、将来何になるの？」
小学二年生の女の子の訊かれた。
「うーん」
その質問に正直僕は困った。僕自身、なりたいものはたくさんある。警察官になって悪い人を捕まえたいし、先生になって勉強を教えてみたい。また、コックさんもいいし、じ

いちゃんみたいな漁師もいい。カッコよく言うと、将来の夢多き小学四年生の少年なのだ。
「まあ、いろいろかな。久美ちゃんは？」
今度は、逆に質問してみる。
「看護婦さん」
「こうくんは？」
「総理大臣」
「ゆいちゃんは？」
「お嫁さん」
子どもらしい可愛らしい夢が並ぶ。そして、はっきりと自分の夢を言える彼らのことがうらやましくも思える。
一方で、自分には絶対にこれになりたいというはっきりとした夢がない。あると言えばあるが、将来の夢とは少し違う。そういう感情に苛まれ、少しだけ劣等感を感じる。
「お前ら、楽しんでるか？」
そこに、勇気にいちゃんがやってくる。
「ゆうくん、お酒臭い」
ゆいちゃんが、にいちゃんから放たれる匂いに顔をしかめる。
僕もお酒は嫌いだ。お正月にお酒を飲むときもなんでこんなものを飲むんだろうと思いながら、唇につけるだけにしている。大人たちは、みんな、大人になればわかるというけれど、僕は一生飲めなくてもいいかなと思う。
「ゆうくんは、将来何になりたいの？」
久美ちゃんが、今度は僕にしたようににいちゃんに質問する。
「俺か？　俺は……働けたらなんでもいいや。じゃあ、みんな、仲良く、楽しんでな」
そういって、部屋から出ていくにいちゃんの姿は、いつもより小さく、悲しそうに見えた。

次の日、僕たち四人とにいちゃんは、近くにある公園へとやってきていた。自然豊かなこの場所は、都会っ子の僕からすると、胸の躍る場所でもあった。
そこで、にいちゃんと鬼ごっこをしたり、かけっこしたりと楽しんでいた。
「勇気。休憩にしようか」
にいちゃんはそう言って、近くにあったブランコに腰を掛ける。僕も隣で寂しそうにしているブランコに足をかける。そして、ブランコをこぎ始める。
「勇気は元気だな」
感心しているのか、あきれているのか、そんな声を漏らす。
「にいちゃんもブランコをこいでよ」
「ははは……」
空笑いをする。

その間にも、僕のこぐブランコはきれいな半円を描きながら、勢いを増していく。
「空が近くにある」
僕が見ている世界よりも高く。そして、大きく見えた。
「ねえ」
「何？」
「空飛べるかな？」
「は？」
にいちゃんは素っ頓狂な声緒を挙げる。
「僕も、鳥みたいに空飛べるかな？」
「……」
にいちゃんは黙り込んでしまう。
「僕将来の夢ってはっきりとしたものがないんだ。けど、やりたいことはあるんだ。鳥みたいに空を飛んで、空の果てまで飛んでみたい」
空は遠かった。
僕は、空へ憧れ、蒼々と広がる世界を自由に飛ぶ鳥を羨んでいた。
「いいよな。羨ましいよ……」
にいちゃんの空虚な言葉は、この世界の無常観を表しているようだった。
そんな、にいちゃんの顔を一瞥し、そして僕は遠すぎる空へと飛びだしていた。

十二年の月日が過ぎ、大学四年生になった。
僕は、にいちゃんの息子を連れて、公園へとやってきていた。
「おじちゃん。ブランコ―」
そう言って、ブランコをこぎ始める。どんどん、大きな弧を描いていく。
「ねえ、おじちゃん。お空がちかいよー。なんかね。鳥さんになったみたい」
「そうだね」
「鳥さんになってお空を飛んでみたいなー」
その言葉を聞き、僕は兄ちゃんときた時のことをふと思い出した。
僕もあの頃は空へと憧れ、空の果てまで飛んでいきたいと思っていた。夢に溢れたあの頃。しかし、大人になった今とは違う。たくさんあった夢は消え去り、就職活動さえもうまくいかず、このままでは無職になりそうだ。
あの時のにいちゃんの気持ちがわかったような気がする。世界の無常観。
あとから聞いた。にいちゃんは、今の僕みたいに、就職先が決まらずにいたらしい。思い描いていた夢。しかし、夢は儚く、破れてしまう。その現実を大人になって知ってしまった。
だから――

「いいよな。羨ましいよ……」
僕はにいちゃんと同じ言葉を紡いでいた。